

報道 されなかつた イラク戦争

「平和・協同ジャーナリスト基金大賞」に輝くフリー記者の、
命がけ現地ルポシリーズ刊行開始！

「日本のマスメディアがほとんど引き揚げた後に果敢にイラク入りし、
市民の目線でイラクの現状を伝えた」(大賞受賞講評)

西谷文和

これはヒロシマ。
ナガサキだ！



西谷文和の「戦争あかん」シリーズ 1

報道されなかった イラク戦争



西谷文和

せせらぎ出版

まえがき 3

第1章 自己責任論の裏側 5

紙一重で命拾い／警官も「フセイン・アメリカ、
ノー」／走り回る戦車隊／日本人が拘束された！
／町に飛び出す／ゼネストの朝／「アメリカ、最
悪！」／小泉やブッシュの自己責任は？／なに、
飛行機代を請求だつて？／解放させた真の力

第2章 激戦地のサドルシティーを行く 19

黒装束の男／えーい、ままよ／撃たれた洋服屋／
黒こげのバス／なぜ撃つんだ！／いつの間にか反
米集会／ヒロシマ、ナガサキを忘れるな／太平洋
を渡った一枚の写真／変化する戦争の構図

第3章 劣化ウラン弾、クラスター爆弾の残虐 31

バグダッド「核・放射線病院」／小児がん病棟
で見たもの／悪魔の兵器／劣化ウラン弾とは／が
んになるまでに5年かかる／そのウランはどこか
ら？／チャイルド・キラーのクラスター爆弾／わ

第4章 フセインとアメリカの本当の関係 43

ざと残す大量の不発弾／クラスター爆弾を今すぐ
使用禁止に

第5章 戦争の民営化 51

―巨大ビジネスとしての戦争―
バグダッドに入る／空港警備の傭兵たち／捨て
去られた傭兵の白骨の山／戦争で丸儲けーブッ
シュ、ビンラディン一族／アメリカの戦争代を支
える日本／ドル↓ユーロ↓ドルの謎

命ぬちどう宝 ―あとがき― 61

コラム ワリードとの出会い・II／その時、マスコミ
は？・18／モスクの叫び・30／地雷について・
42／ブッシュとビンラディンの本当の関係・50
／戦争はなぜ起る？・60

まえがき

2004年末、私は足かけ20年勤めてきた市役所を退職し、晴れて「自由業」となった。「公務員を辞めた」ことについては、多くの人々から「なんともったいないことを」と驚きの反応が返ってきた。「えっ、役所辞めたん?」「はい」「奥さんいるの?」「ええ、1人だけ(笑)」「子どもは?」「高校生を筆頭に3人」。よー嫁はん許しよったなー、となかば呆れなかば羨望のまなざしで見られたものだった。

もともとジャーナリストを志していたわけではない。しかし人一倍好奇心は旺盛だった。1993年、PKOで自衛隊が初めてカンボジアに派遣された時、有給休暇をとって取材に出かけた。地域ミニコミ誌の編集をしていたので、帰国してから発表の場があったのが、「やりがい」を支えてくれた。以後私の一人旅はずんずんと発展し、休暇をとっては南アフリカ、ボスニア、コンボと、紛争地取材を繰り返してきた。

そんな時に9・11事件が起こった。ブッシュが「これは戦争だ!」と叫び、21世紀の世界は大きく戦争へと舵を切った。私の人生も変わった。

2回目のイラク取材中、日本人3人が拘束された。ちょうどその時バグダッドにいた日本人ということで、私は俄然注目された。帰国後「日本が自衛隊を派兵したから狙われたのだ」と各地で訴えたものだから、「地方公務員のくせに国の悪口を言うな」「西谷の有給休暇を許可した上司の責任を問う」など、有形無形のプレッシャーが「自己責任論」とともにかかり、私は公務員を続けるか、イラクに行き続けるか、の二者択一を迫られた。

結果的にはこれが良かった。踏ん切りよく退職し、いつでもイラクにいける体制ができた。その意味では、私を追及してくれた自民・公明などと党議員さんたちに感謝しなければならない。

「同じく危険なイラクに行き続けるのですか?」と聞かれることがある。

私とイラクの距離が近いからだと思う。例えば阪神大震災では多くのボランティアが救済に駆けつけた。家の下敷まで

圧死した人、震災後の火災で焼かれた人……。犠牲になった多くの方々、田中さん、山本さん、鈴木さん……。私たちはあの時、神戸のことは決して忘れないと誓った。

私にとって、それがムハンマド君、ファーティマちゃん、ハッサンさん……であるだけだ。ただ一つ違う点がある。それは……。

神戸は何百年に一回の自然災害であったが、イラクは人間が犯した過ちであったということだ。

「今、私たちの国は血を流している。米軍が撤退しない限り、多くの人々がこれからも血を流し続ける。私たちが必要としているのは、自衛隊という軍隊ではなく、民間の平和な援助だ。戦車に乗り軍服を着た人が『イラク人を助けに来た』と言っても私たちは信用しない」。

友人、イサム・ラシードの言葉。現在のイラクは内戦状態で、1日に約1000人が殺される最悪の状態。電気は毎日1〜2時間しか通電せず、きれいな水が供給されないため、疫病が流行っている。

しかし明けぬ夜はない。きっとイラク人たちが、宗派や政党を越えて団結し、米軍を追い出すだろう。中間選挙でのブッシュの敗北、ラムズフェルドの更迭と、希望の光が差し込み始めている。イラクから米軍が撤退するまであと少し。世界中の人々が「無法な戦争やめろ」と立ち上がって声を上げれば、撤退は早い。多くの人が「自分には関係ないこと」と、無視すれば、撤退は遅れる。つまりそれだけ長く無実の人々の血が流れる。

この本が、戦争に反対し平和を願う人々を励まし、イラク戦争をやめさせる一助になれば幸いである。

Although the world is full of suffering, it is also full of overcoming it.

「世界は苦難に満ちているが、それを克服するものにも満ちてい[る]」——ヘレン・ケラー

2006年12月

第1章

自己責任論の裏側



紙一重で命拾い

あれ!? 実家の前に黒い布。親父とおかんが泣いているぞ。誰の葬式やる? 祭壇に飾つてある写真を見ると……えっ? 俺やないの。なんで? 死んでしまったのか、俺は……。

「ニシ、起きろ。バグダッドで銃撃戦が始まり、米兵が7人も殺された!」。

通訳ハリルの怒鳴るような大声。時計を見ると午前2時。アルジャジーラTVが臨時ニュースを伝えている。バグダッド東部、サドルシティーでシーア派ムクタダ・サドル師の民兵と米軍との間で大規模な銃撃戦が始まったのだ。悪い夢を見た私は、「まだ死んでいなかった」という安堵感と、テレビの中の現実、つまり銃撃戦の恐怖とが交じり合う。

「どうする? 今すぐ出発するか?」。

「すぐに出よう。国境が閉まればイラク入りできない」。

当時私は地方公務員であった。限られた有給休暇の中での取材だったため、一刻も早くイラク入りし

たかったのだ。実はこの日から1週間、フアルー

ジャ、サドル

シティー、ナ

ジャフなどで

米軍による猛

烈な空爆が始

まり1000

人以上のイラ

ク人が殺され

ていくのだ

が、結論から言えば「すぐに出発した」ことで、私は

命拾いすることになる。

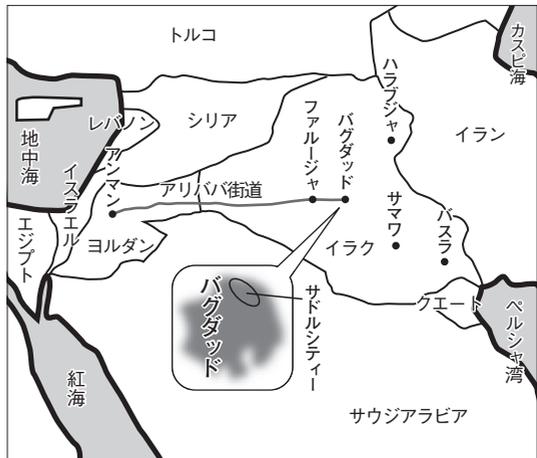
04年4月4日午前3時、ハリルの運転で私たちはバ

グダッドへ向かう。アンマン〜バグダッドを結ぶ、通

称「アリババ街道」をぶつ飛ばす。砂漠の中の一本

道、考えられる最悪のシナリオは、どこからともなく

現れる盗賊団に「ホールドアップ」と拳銃を突きつけ





ファルージャで通行止めをする米軍

られ、所持金や車を奪われてしまうことだった。まさかその4日後、日本人3人ははじめ多くの外国人が「身柄ごと奪われる」とは……。

ユーフラテス川に近づくにつれて、茶色い砂漠の大地が緑へと、人家の立ち並ぶ「生命宿る都市」へ変わっていく。

「ファルージャだ」。

1週間ほど前、アメリカの傭兵が4人殺害され、遺体を橋からぶら下げたことで有名になった街。

「ここは激戦地なのでスピードアップして通り過ぎよう」。

ハリルはさらに速度を上げてアリーブバ街道をすつ飛ばす。バグダッドまで数十キロとい

う地点だった。前方に米軍の戦車が数台。道路を封鎖している。

「ここから先は通さない。ファルージャの街に入ることは許さない」。

見たところ20歳そこそこの若い米兵が冷たく言い放つ。今まさに米兵が国道に鉄条網を仕掛けて通行不能にする作業をしているときだった。戦車の傍らには、後ろ手に縄で縛られたイラク人が2人、背中合わせに座っている。

「かわいそうに。あいつらはアブグレイブ刑務所行きだな」。

ハリルがつぶやく。

仕方なくアリーブバ街道を離れ、迂回路を走る。ガソリンスタンドがある。何の変哲もないガソリンスタンド。給油する人、車を拭いている人、ガソリンスタンドの横にはフルーツを売る屋台……。

それから3日後、同じルートを通って人道支援にやってきた日本人3人が拘束されることになる。彼らはガソリンスタンドで拘束された。私の脳裏にはあのスタンドの光景が焼きついている。あの時ハリルがあ

そこで給油していれば、私が「1人目の人質」になっていたかもしれない……。

ファルージャからバグダッドへの道は「クレイジー」の一言だった。アパッチヘリが低空で飛び回り、道路は戦車で寸断され、装甲車から米兵が銃を水平に構えて、道行く車を狙っている。そう、私の出発した4月4日、明けて5日は、米軍が見境なくイラク人を虐殺し、泥沼の戦争に突っ込んでいく、ターニングポイントとなった日なのである。

警官も「フセイン・アメリカ、ノー」

ファルージャの人々が虐殺されていたとき、バグダッドは比較的静かだった。

ホテルで、レストランで、人々はテレビにかじりつき、ファルージャの様子を食い入るように眺めている。通訳のワリードと街へ出て、市民インタビューを試みる。

目抜き通りを走っていると、「ビール、日本酒各種 鎌田商店」と大書されたトラックを発見。日本の中古車がここまで流れてきている。運転手は小太りの中年

親父だ。

〈何を運んでいるの?〉

「家具だよ」。

〈ビールと違うの?〉

「酒は運ばないよ。引越しなどのときに家具を運ぶのさ」。

〈ずっと、運送業を?〉

「いや、サダム（フセイン）時代、俺は警察官だった。サダムが倒されて失業したんだ。このトラックかい? 会社のものだよ」。

私の大き目のビデオカメラを見て、赤シャツのおじさんがやって来た。

「俺の経験を聞いてくれよ。20日前のことだ。いきなり米軍が俺の家にやって来た。ヤツらは5人でズカズカと俺の家に入り込み、息子たちの前で俺の腕を縛



ビールでなく家具を運ぶ運転手

り上げ、頭に銃を突きつけ、3時間に渡って尋問したんだ。(息子の前で縛り上げられることはアラブ人にとってかなりの侮辱)」。

〈なんであなたはそんな目に?〉

「秘密警察の一員という容疑だよ。サダム時代、俺は確かに警察官だった。でも単なる交通警察官さ。必死で『単なる交通警察官だ、秘密警察ではない』と叫んだよ。危うく刑務所送りさ。米軍はサダムより悪いね。そんな米軍に何で日本は協力するんだい?」。

〈何か日本政府に言いたいことは?〉

「えーと、お前たちの大統領は……」。

〈小泉!〉

「そーだ、コユズミ! 俺たちの声を聞け。どんな外国軍もいらなんだ。たとえ『人道支援』だとしても軍隊はいらぬ! アメリカの占領に協力するな。ファルージャもナジャフもアラブの町だ(ファルージャはスンニ派、ナジャフはシーア派の街)。アメリカは我々を分断しようとしている。イラクは統一されねばならない」。

赤シャツの男は私のカメラに向かってこう叫んだ。

ビデオカメラを肩に担いで大通りを行く。警官がいる。彼らはCPA(占領当局)、つまり米軍に雇われている。微妙な立場にいる彼らは何を考えているのだろうか。

〈名前は?〉

「ウダイ・アツバース」。

〈フセインの長男ウダイと同じだね(笑)。警官になったのは?〉

「2年前だ。戦争後も俺は雇われた」。

〈アメリカの占領についてどう思う?〉

「サダムを倒してくれたのはいいことだ。でもその後がいけない。我々に権力を与えてくれないとダメだよ。治安が悪くなる一方だ」。

〈自爆テロは怖くない?〉

「1週間前にパトカーの後部窓が撃たれて粉々さ。我々は3人1組でパトロールしているが、同僚が1人殺されてしまった。誰がどこから撃ってくるかわからないので恐ろしいよ。ムクタダ・サダル師が立ち上がったから治安が悪くなったね」。

〈どうしたら解決すると思う?〉

戦争はなぜ起る？

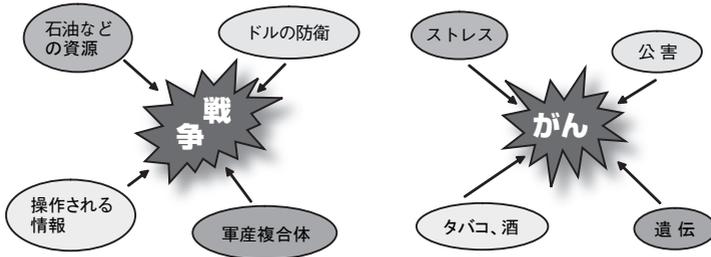
ブッシュ大統領が、「テロとの闘い」を口にする。アメリカは常に正義で、イラクやイランは悪。

西部劇さながらの単純で、ブッシュは戦争を始めた。しかし、戦争は「テロとの闘い」のような単純な理由では始まらない。凶のように、タバコを吸っただけでがんになるのではなく、遺伝体質や大気汚染、ストレス、老化、酒の飲みすぎ、食品添加物……。様々な理由が水面下にある。これら「発がん要因」がある一定の基準を超えたとき、がんを発症するのと似ている。

戦争の場合は、石油資源の争奪戦、ドルの防衛、軍産複合体の圧力、民族・宗教対立をおおる政治家、情報操作されるメディア……。これらの戦争要因が背後にあって、一定の基準を超えたときに、戦争が前面に出てくるのだ。

がんは今や不治の病ではなく、病院でしっかりと治療し、薬を飲めば完治する。戦争の場合、病院にあたるものはなんだろうか？

それは国連であろう。国と国が話し合い、外交努力をすることで、戦争を未然に防ぐ知恵を出す。本来なら国連憲章に基づいて、防げる戦争がいくつもあったと思うが、残念ながら、まだまだ「国連はやぶ医者」なのだ。アメリカの暴走を止めるだけの力をつけていないのが実情。しかし



話し合いの場所は、やはり国連であるべき。私たちの世論で、国連を「名医」に変えていかねばならない。

では薬に当たる物は？

それが教育と文化交流ではないか。広島・長崎の歴史、満州事変のこと、慰安婦にされた女性の悔しさ、ヒットラーのやったこと、ベトナム戦争……。これらを学び、「戦争で苦しむのは、一般人の人々」という真実を学ぶ。そこに学校があって、正確な教科書があれば、人は学習する。

あるいは、例えばモスクや教会などへの相互訪問が日常的になれば、「あの美しい青のモスクを空爆してはいけない」「きれいなステンドグラスの下で聞いた讚美歌は素晴らしい」と互いに、文化交流があればなあ、と感じる。

こうして考えてみると、一番よく効く「戦争の薬」は、日本の憲法9条なのだろう。歴史や文化、言葉や風俗を学習し、「戦争は絶対悪で、武器を持つから戦いが起こる」と、私たちは学んだ。その結果としての9条。

安倍内閣が、「美しい国」をキャッチフレーズに教育現場に介入し、教育基本法に「愛国心」を盛り込んでしまった。戦争が大好きな若き指導者は、この「薬である教育」が邪魔なのだ。

教育が変わり、そして最良の薬、9条が骨抜きになる前に、起ち上がって声を上げよう。

命ぬちどう宝 —あとがき—

「破水しました。今病院です」。

「産まりました。女の子です」。

レバノン・ベイルートのネットカフェでメールを開くと、妻から緊急メールが入っていた。妻のメールに続いて、

「赤ちゃんの耳が形成異常、心臓に障害があつて仮死状態。早く帰ってきて!」。

と娘から悲痛なメールが、耳の形成異常、心臓に障害、仮死状態……。思いもよらなかつた言葉がぐるぐると私の頭の中を駆け回つた。と、同時にどす黒い疑惑が鎌首をもたげた。「俺がイラクに行つたからではないのか?……」。

「18トリンミーです。人間の遺伝子は22対あるのですが、赤ちゃんの場合、18番目の遺伝子異常で、遺伝子に腕が3本、つまりトリンミー……」。

担当医師の説明がうつろに響く。

18トリンミーの子は心臓が正常に発達してないこと、耳や口、顎が形成異常になりやすいこと、良くても1年くらいしか生き続けることができないこと……。私たち家族にとって絶望的な言葉が並ぶ。

わずか13日間で二女宝は、星になった。宝の人生は保育器という箱の中だった。バグダッドで出会つたがんの子どもたちも、人生の大半を保育器やベッドの上で過ごして、やがて星になった。その姿を見て、私は親たちに「今の気持ちは?」「何ががんの原因だつたと思う?」などとインタビュしてきた。首がふくれ上がったガフィル君、背中に大きな腫瘍のできたアリーちゃん、右足付け根に野球ボール大の腫瘍を持ったムスタファ君に出会つたとき、心の中で「やった!」と叫ぶ自分がいた。「この写真を撮れば、日本のみなさんに劣化ウラン弾の非人道性を伝えられる」としか、考えていなかっ

た。まさか自分自身があの両親たちと同じ立場になろうとは……。

「命じり玉」という有名な沖縄の言葉。いじめ、自殺が相次ぎ、06年を代表する漢字は「命」だった。辛いことがあっても、生きてさえいければいいことがある。死んでしまえばおしまいだ。キラキラと輝く子どもたちの瞳が今、イラクでは戦争で、日本では受験競争と所得格差の広がり、徐々に曇ってしまっている。

私の夢は、イラクの若者と日本の若者との現地交流である。イラクの若者は、日本のように平和で豊かな国になるために頑張ろうとするだろうし、日本の若者は、戦後日本が戦渦に巻き込まれてこなかった幸せに感謝し、復興に向けて起ち上がるイラク人のエネルギーから多くのことを学ぼう。

お金でなく、地位でも名誉でもなく、競争でもない。人と人が触れ合って手を結ぶとき、私たちは幸せを感じるのだ。命こそ宝という考え方でこそ、イラクと日本を救う道だ。

最後に、この本を編集するにあたって、せせらぎ出版の山崎さん、漫画家の高宮さん、高尾、松井記者はじめ毎日新聞のみなさん、通訳のワリードとハリル、写真を提供してくれたイサム・ラシード、ブックデザイナーの濱崎さんなど多くの方々の協力をいただいた。改めて感謝したい。

そして何より、天国にいる宝に、この本をささげたい。

2006年12月

西谷 文和



民兵たちに招待されいっしょに昼食

西谷 文和 (にしたに ふみかず)

1960年京都市生まれ。立命館大学理工学部中退。大阪市立大学経済学部卒業。吹田市役所勤務を経て、現在フリージャーナリストでイラクの子どもを救う会代表。イラクやアフガンでの取材を続ける一方、地域ミニコミ誌「くおーたりー吹田」の編集にも携わる。

現在、うめかもネットワーク（梅田貨物駅の吹田移転反対運動）の事務局長、吹田市民新聞主筆、元黒田ジャーナル記者たちと編集する「うずみ火新聞」共同代表。

2006年度平和協同ジャーナリスト基金大賞を受賞。

著作に、DVD「戦争あかん」、「危ない！この先は崖っぷち」（共著・憲法9条メッセージプロジェクト）、『南ア・ボスニア・カンボジア。なにわの公務員ドキドキ一人旅』（かもがわ出版）などがある。

イラクの子どもを救う会 <http://www.nowiraq.com/>

- 装幀——濱崎実幸
- 漫画——高宮信一
- 図版——清水修二

西谷文和の「戦争あかん」シリーズ① 報道されなかったイラク戦争

2007年2月15日 第1刷発行

2007年5月25日 第2刷発行

定 価 600円（本体571円＋消費税）

著 者 西谷文和

発行者 山崎亮一

発行所 せせらぎ出版

〒530-0043 大阪市北区天満2-1-19 高島ビル2階

TEL. 06-6357-6916 FAX. 06-6357-9279

郵便振替 00950-7-319527

印刷・製本所 亜細亜印刷株式会社

©2007 ISBN978-4-88416-162-0

せせらぎ出版ホームページ <http://www.seseragi-s.com>

メール info@seseragi-s.com



この本をそのまま読むことが困難な方のために、営利を目的とする場合を除き、「録音図書」「拡大写本」等の読書代替物への媒体変換を行うことは自由です。製作の後は出版社へご連絡ください。そのために出版社からテキストデータ提供協力もできます。

へいわのうた

宇治共同作業所 作詞・作曲
のびのび班



1. じらいをつくったエ ライひとは 子どもたちのあし ふきとばした こと
2. せっかくうまれてき たんやのに キカンジュウのおと ばくはつのけむり



知ってーいるんやろー かな じらいをうめーたへ いーたいは
きつとーこわいやろ かな なんにもわるいことし てへんのに



あるけないことーのー ほんとのくやしきー 知ってーいるんやろー かな
ちきゅうじゅうのこどもが しんだらあかんとー ポクラはおもーうん や



バクダンじゃなくて ごはんがいい “かなしい”じゃなくて “うれしい”がいい



みんなおんなじ いのちだから せんそうじゃなくて “やさしい”が いいー

日本音楽著作権協会(出)許諾 第0700397-701号

うた草ホームページ (<http://www.l3.plala.or.jp/utagusa/>)
でこの曲が流れます。

西谷文和のDVDシリーズ



No.1 戦争あかん 1000円(税込)

No.2 イラク 戦場からの告発 1000円(税込)

ご注文は ●イラクの子どもを救う会 (tel/fax 06-6192-7033)

●せせらぎ出版 (tel 06-6357-6916) (書店では販売していません)

もっと読む

- 電子本（PDF版、税込420円）を購入する
- 紙の本（税込600円）を購入する